

「患者のそばに 看護は家族の心に残る」



看護学生らが死生観を養うために行われた鍋島直樹教授の講演会。滋賀県栗東市

看護学生に鍋島・龍谷大教授講演

未来の医療現場を担う看護学生たちに死生観を養ってもらおうと、滋賀県済生会看護専門学校（栗東市大橋、杉本徹校長）で1日、龍谷大文学部の鍋島直樹教授（真宗学）による講演会が行われた。鍋島教授は、医

療現場で患者や家族の悲嘆に接する「臨床宗教師」を養成しており、終末期の患者について「心の支えがあれば、生きる力を取り戻せる」と強調。学生約150人はメモを取りながら熱心に聞き入った。（小野木康雄）

近代看護の礎を築いたナイチンゲールの誕生日に当たる「看護の日」（5月12日）にちなんだ学内行事。学生らが死をテーマにした講演会を企画し、浄土真宗本願寺派の僧侶として傾聴活動にも取り組む鍋島教授を講師に招いた。

鍋島教授は「患者はだれかを愛し、だれかに必要とされることで死の孤独を打ち破っていける」と指摘。「看護師にとって大切なのは、何かをすることではなく、患者のそばに居ることだ」と強調した。

その上で、研究テーマの一つである官沢賢治を引き合いに「人は死んで終わりではなく、光のように輝き続ける。みなさんが一生懸命看護したことは、必ず家族の心に残る」と訴えた。

実習で患者の死に接した経験があるという3年の横井愛美さん（27）は「自分に何ができたのか、あの看護で良かったのかと自問自答してきたが、間違いではなかったと思えた。これからは悩むことはあると思うが、覚悟を持って患者さんと向き合いたい」と話した。